

※「はらまち九条の会ホームページ」が12月に開設。http://www.haramachi9jo.net
 「はらまち九条の会」だけで簡単に開くことができます。投稿もお待ちしております。



九条はらまち

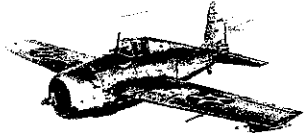
「はらまち九条の会」会報 No. 137

2010(平成22)年6月18日(金)発行

【戦争体験文中のことは】

<1945年のこの日、沖縄でひめゆり部隊等の女学生らが集団自決>

- 艦砲射撃 (かんぼうしゃげき・軍艦に備えつけた砲からの射撃)
- 艦載機 (かんさいき・戦艦や巡洋艦などに積載し、甲板から発進する航空機)
- 機銃掃射 (きじゅうそうしゃ・攻撃機の上空からなどの機関銃による広角度の発射)
- グラマン機 (全長8.5m、全幅11.6mの小型の単機機で、低空からの機銃掃射で恐れられた。昭和20年8月の原町空襲はこの機で行われた)



グラマン機



終戦の頃の原町飛行場 後編

原町区馬場 志賀五三三

前編(No.134)の内容
 戦時中の私は相馬農藝学校の生徒で、終戦の時は十四歳。三人の兄は出征し、三男・敏美はフィリピンで特攻隊で戦死する。二十年二月十六日、志賀家の近くの原町飛行場と原町紡織工場が空襲されるが、それを私はしっかりと目撃し、体験した。

家は飛行場警備隊の宿舎に

私の家は原町飛行場の正門から五百メートルの地であり、その間の道路も整備され、沿道には柿や桑の木などの木立が並び、我が家は江戸時代は肝煎きもいりをつとめた大きな農家だったので、飛行場警備隊の宿舎に割り当てられた。飛行場十数名の兵士が四、五台のトラックとともに移ってきた。彼らは北海道から鹿児島まで広い範囲から召集された中年の兵士で、班長は山形出身の小野寺伍長と聞いた。彼らは被弾して陥没した滑走路の補修などを担当していたようだ。

少ない弁当に両親が泣き入り

兵士たちは座敷の七つの部屋に寝泊まりし、昼夜を分かたず頻りに出入りした。夜になると蚊帳のなかで、郷里や家族のことを話しあつてすすり泣く様子も耳にした。

毎食の弁当は飛行場の炊炊所から運ばれてきたが、食器の中のご飯やみそ汁は驚くほど少なく、古参兵は運んできた当番兵に不満を浴びせかけていた。都市だ

けでなく農家でさえ、米櫃こめびつの中は空っぽという時代だった。見かねた両親は、我が子のように憐れみ、時々ジャガ芋や炒り豆などを差し入れていた。

飛行場本部も我が家に移転 柿の木の上に対空監視所も

釜石への艦砲射撃があつた七月ころ、飛行場の本部事務所も我が家に移転してきた。上座敷の一室が会議室となり、通信線も引かれた。

奥の一室には、前年の昭和十九年十一月六日戦死した私の兄の、「神風特別攻撃隊零戦隊海軍少尉 志賀敏美」と明記された祭壇と遺影が置かれ、戸締めされていた。

家の百メートル前方の桑園の柿の立木には、対空監視所が設けられ、兵士が配置された。裏山には無数の「タコ壺(二人用の防空壕)」が掘られ、裏通りの道路わきには一基の銃口が上空に向け据え置かれた。

八月九日 米軍艦載機の来襲

終戦間近の昭和二十年八月九日、浜通り沖二百カイリに接近した米機動部隊の空母十六隻から、艦載機が群れをなして発艦していった。この日東北だけで千六百機の米軍機が投入され、その一部が原町に来襲した。これが「原町空襲」である。

午前十時頃、飛行場めがけて攻撃を始めた。グラマン機は、国見山上空から決まったコースで我が家の真上から

飛行場めがけて急降下、機銃掃射と爆弾投下を繰り返した。

機銃掃射に為す術もなく



▲志賀家の庭先に無数に散乱していた米軍機からの葉莖。(市博物館に寄贈)

庭先に炸裂音が響き、爆風が吹き荒れ、ガラス戸が吹き飛んだ。柿の木の上に対空監視所にいた兵士も爆風に煽られて落下した。

敵機が去つたあとの庭先には無数の銃弾のガラ葉莖や爆弾の破片が散乱していた。咄嗟のことで、屋敷の裏に備えていた機関銃口からは、最後まで火を吐くこともなかった。混乱する飛行場からは二人、三人と、日の丸鉢巻きで飛行服を身にまとつた陸軍特攻兵士が裏の川沿いに避難してきた。

米軍は、相馬の生徒たちが作ったベニヤ板のニセ飛行機や、飛行場周辺や掩体壕えんたいこうに隠した戦機を狙つて機銃を浴びせ爆弾を投下した。午後には、原町紡織工場が銃撃されて猛火を發した。

明るく八月十日は、二千機の米軍機が発艦した。原町にはグラマン六機が南方から飛行場に襲撃した。急降下しながら機銃掃射してくる敵機に、少年飛行兵や少年航空通信兵たちが機関銃で応射し立ち向かつたのか、一名が被弾し戦死した。十六歳の少年兵だつた(裏面に続く)

(表のページより)

相馬郡だけで五十人の死者

この日の波状攻撃で、相馬の畜舎と教室も直撃弾をうけて家畜が殺され四教室が焼失した。また原町国民学校や原町駅の機関区など、市内のあちこちが被害を受けた。他の編隊は、浜通りの海岸地区に波状攻撃を仕掛けた。母の生家のある鹿島地区でも、住民が周辺山林を逃げ惑った。この日、相馬郡だけで五十人前後の死者を出した。

大本営陸軍部作戦部長が来宅 空襲で私と防空壕に飛び込む

空襲のあった八月九日の朝、四人の将校が車で我が家に来てくれた。三人とも腰に軍刀、胸にモールをつけ、見るからに高級将校の出立ちであった。奥座敷に通されると真つ先に、神風特攻で戦死した兄の敏美の祭壇に手を合わせた。

そして飛行場本部事務所となっていた部屋で秘密会議を始めたその瞬間、グラマン機による空襲が始まった。私の誘導で将校たちは奥座敷廊下に出て防空壕に飛び込んだ。

その中でひとりの将校が「特攻隊で戦死されたのは貴方のお兄さんですか」と私に尋ねた。「そうです」と答

えると「立派なお兄さんですね」と言った。この防空壕でのやりとりが、忘れ得ぬシーンとして永年、今でも私の脳裏に強く焼き付いている。

敵機が去ったあと、将校たちは壕から出て話を続けたようだが、いつの間にか姿を消していた。敏美の祭壇には、「大本営第二課・陸軍中佐稲葉正夫」の名刺が残されていた。

宮崎周一陸軍中佐の日記に 八月九日原町空襲の記述

来訪した将校は、参謀本部第一部長、即ち大本営陸軍部作戦部長宮崎周一陸軍中佐と、同じく作戦担当の第一課第二課班長稲葉正夫中佐ほかの幕僚だった。

大本営の中核メンバーは、何のためこの原町までやってきたのだろう。稲葉中佐は八月十三日の夜、徹底抗戦を企図してクーデターを計画したとは聞いていたが、原町来訪と関係があったのだろうか。長い間それが謎だったが、今年平成二十二年二月になって、『宮崎周一の日記』を手にしてようやく判明した。

日記には、原町飛行場に視察に飛来し、空襲に遭い、夕刻原町飛行場から所沢経由で参謀本部に帰着した

ことが明記されていた。

八月十五日ついに終戦 天皇の言葉に嗚咽が広がる

十五日の朝、ラジオニュースが「本日の正午、天皇陛下の放送がある」と報じた。志賀家に滞在している兵士たちに動揺が走った。

正午を迎えた。兵士たちは庭先に全員が整列し、初めて聞く天皇陛下の言葉に耳を傾けた。それは戦争の終結を宣言するものだった。兵士たちの間に嗚咽がひろがり、戦闘帽で額から流れる汗と、目からあふれ出る涙を拭うのであった。

兵士たちは関係書類を焼却

皇居に向かって黙祷したあと、進駐軍に捕らわれるという噂がながれ、一斉に所持品の始末が始まった。関係書類を屋敷前の畑に積み上げて火をつけた。炎が「すべて終わった」を宣告しているかのようになり、見る者に寂しさと悲しさを呼び起こさせた。一方で、今夜からは灯火管制を気遣うことなく、また空襲警報のサイレンに悩まされることもない、戻ってくる平和な暮らしに思いが湧いた。それまで殺気立っていたように付き合ってきた兵士たちも、「おぼさん

サヨナラ」の声を残し、トラックに分乗して何れへともなく去っていった。家族のもとに無事帰り着くだろうか、不安と寂しさが見送った。戦争も終わり、兵士たちが去って、我が家に静けさが戻ってきた。あとには出征している兄や姉たちの帰還を待つばかりである。

義兄はシベリア抑留 長男の兄は遺骨箱で帰還

いよいよ戦地からの復員が始まったとのニュースが流れ、長女が戻った。しかし次女の夫はシベリア抑留、ほかの肉親も家族ともども引き揚げてきた。しかし、二人の兄からは何の連絡もなく、両親の日常の振る舞いの中に、息子の帰還を待ちわびる心情が滲み出ていた。

終戦の翌二十一年六月、次男・英勇がひよっこり復員。翌二十二年五月、家を継ぐべき長男・多男は、一枚の紙片の入った遺骨箱となって帰還した。紙片には「昭和二十年五月一日、フィリピンにて戦死」と書かれていた。出征してから六年後のことであった。

戦争は絶対許せない

私は四男三女の兄姉で、兄二人が戦死。無事復員した次男は、長男の帰還を考えて家を出た。しかし長男の戦死で、結局四男で末っ子の私が志賀家を継ぐことになる。

戦争は絶対許せない。相手を、人を殺すことだから。特攻隊で戦死の兄敏美の胸像や石碑が、夜ノ森公園や馬場の墓地に建立されたが、あくまで「平和祈念像」としてある。平和であることが一番大切なことです。

二上英朗さん編著

- ①「遙かなり雲雀ヶ原・原町陸軍飛行場ものがたり」(平成7年発行)
 - ②「原町空襲の記録」(昭和57年発行)
 - ③「昭和史への旅」(昭和58年発行)
- 3著作は、原町の戦時中のことや空襲を、綿密な取材と調査で克明にまとめられていて、戦後65年の現在、大変貴重な資料となっています。図書館にあります。



昭和史への旅

二上英朗 著

○終戦から65年。「今のうちに戦争の体験を話しておきたい」という方が増え、全国的に戦争体験の発表が盛んです。ぜひ皆様の「戦争体験」もお聞かせください。事務局まで連絡をお願いします。